

事後評価報告書(日本－インド研究交流)

1. 研究課題名:「動的かつ階層的な暗号鍵割当方式の安全性証明と学際評価

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者:

東京大学 生産技術研究所 准教授 松浦 幹太

2-2. インド側研究代表者:

デルバニ・アンバニ情報通信研究所 教授 Anish Mathuria

3. 総合評価:(A)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

情報セキュリティ経済学、暗号の安全性証明など基礎的・学際的な研究であるが、理論面のみならず実証面でも成果を出している点は評価できる。多くの研究発表を行っており、表彰の多さからも学会にも評価されたことが伺える。ただ、申請時の提案書の研究目的と比較すると、最終報告書では研究項目が違っている。研究の進展により当初の研究計画に変更が加わることは理解できるが、本研究における変更の理由については記載がなく報告書からは読み取れなかった。また、情報セキュリティ経済学と安全性証明モデルとの関連もややわかりにくい点も残念である。

(2)交流成果の評価について

多くのワークショップの開催、相互訪問をふくめ活発に交流が行われた。情報セキュリティに関連した、他の2課題と合同でワークショップ等を開いて交流を深めたのは、関連知識の取得など、それぞれのチームにとって有益だったと思われる。ただ、インド側の貢献が具体的にどの研究結果にあるのか読み取りにくく、従って交流成果というのも見えにくい。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

定量的な評価として、論文数、ワークショップ開催など十分な成果である。ただ、全般的に言って、日本側の成果は十分に記述してあるが、インド側の貢献の記述が少ない。発表論文も日本側研究者が主体であり、インドとの共同研究としての共著論文が少ない。なお、あえて修士課程学生を入れたのは、人材育成の面から言って、良かったと思う。学生表彰はその成果の現れとみられる。